

最新のエビデンスと  
ナラティブが今、解き明かす

# 伝説の 歯科医療

山田康彦 山田桂子

編著—山田晃久

*Legend*

限られた歯科医師だけに語り継がれた

*of*

知られざる歯科医療が、

*Dentistry*

伝説の歯科医師たちを励まし、奮い立たせた

医歯薬出版株式会社

# Chapter 1

## 知られざる先人の教え

### 現代日本の歯科医療を取り巻く環境

1961年戦後日本で健康保険制度がはじまるまでは、歯科医療はすべてが自由で、自費診療などという言葉すらありませんでした。

保健診療は、国民皆保険のコンセプトの下で認知されていきました。

それは、制度によって制限された歯科医療の中の算術的な小さなことに過ぎません。

保健診療の“制限”に対する“自由”とは、よく言われる自由＝自費診療のことではありません。

“自由診療”とは、歯科医師の自由な裁量に基づくもので、制度やシステムに束縛されない診療の自由、歯科医師としての信義を問う、誇り高い言葉です。

歯科診療を行って、何かの組織に依って、治療行為に対し正当な対価を直接受益者である患者さんに求めず、後からお金が支払れるような制度の中では、責任と誇りを持った良い歯科医師は育たないのです。

「保健診療だから……」という言い訳をやめて、正々堂々と

患者さんから直接お金をもらいなさい。

それによって、自分が行った歯科医療の責任を真摯に受け止め、自覚することができ、はじめて、自信と誇りと成果を得る事ができるのです。

今、保健歯科医療の束縛から離れて、自由な歯科医療を実践しよう！！

山田康彦

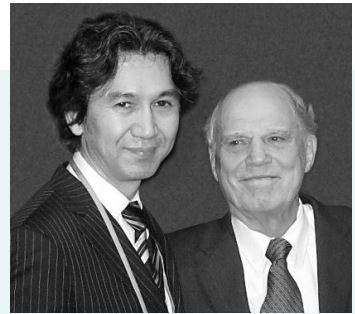
## 歯科医療の目的<sup>2)</sup>

卒直後、私の勤務した東京渋谷の父の医院は、ビーチ先生のコンセプトに基づいて創られた診療所でした。

それは機能的で合理的、シンプルで明確なコンセプトをもったものでした。

駆け出しの何も知らない若き歯科医師の私には、それが唯一の歯科医療でした。幸い、母校である大阪歯科大学での臨床実習をした診療室は、ビーチ先生が考案されたモリタ社製の診療ユニットでしたので馴染みのあるものでした。ビーチ先生はこうした診療ユニットの開発とともに、診療システムとフィロソフィを提唱していました。

それが“HC-0”“歯科医療の5原則”と言われるものです。



D.R. Beach

顧問を務める CDC 50周年記念講演会で  
ビーチ先生と筆者

### 歯科医療の目的 HC-0

“歯科医療の目的”をネット検索してみると、そのサイトの歯科医師が独自の目的を掲げ一貫したものがみつかりません。

例えば「患者さんの抱えた歯科的な問題を解決すること」という目的を掲げたとします。問題が解決したら、その歯科医院はその患者さんにとって不要となります。もちろん問題を持たない人には縁がないことになり、このような目的では予防が成立しないのです。

疾患中心、問題中心、治療技術中心で歯科医療の目的を考えるとこんな結果となります。

父は、治療技術も重視しましたが、それ以上に歯を削ることの問題と治療技術に限界を感じ、予防をベースとした歯科医院を模索したのでした。

そんなとき、ビーチ先生に出会ったのです。

## 偉大なる歯科医療の改革者たち II

# パンキーフィロソフィ<sup>3,4)</sup>

開業医となり、歯科医院経営を考える時、歯科医師として目の前の患者さんを治療している時とは明らかに違う問題に直面します。

自費か保険か？ 診療効率、スタッフ、家賃、給与、増患、集患？

ただ治療していればよかった勤務医の時とは、明らかに違うことについて考える必要があるのです。

しかし、多くの場合、開業以前にこのようなことに十分な知識や考えを持つ歯科医師はごくわずかだと思います。

このような問題に直面したとき、私たちが前進させることができるのが、

治療技術の問題よりも、思うに任せないのが患者さんのことなのです。

歯科医療の価値を理解し、その恩恵に与れるのは患者さんなのです。

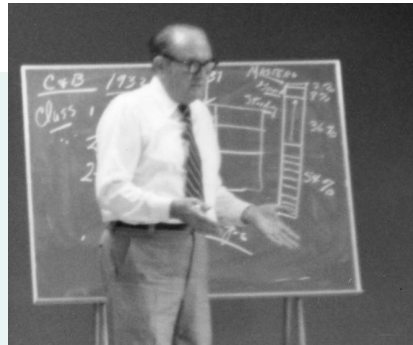
この患者さんの問題について説いたのがパンキー先生なのです。

パンキー先生は「歯科医療成功のカギはコミュニケーションである。」と言います。

患者さんと私たち歯科医療者をつなぐもの。それがコミュニケーションです。

## パンキーのデンタルIQエレベーション

私はよく地方の先生方から「東京は患者のデンタルIQが高いからいいですね」と言われますが、地域性として歯科医療に対する情報が多く認識が豊富でも、EBMの高い治療を受けてもらえるとは限りません。



L.D. Pankey  
1978年初来日京都講演



# Chapter 3

## 歯科医療の自由を求めて

### 自由への5ステップ

#### The Winning Combination—A Philosophy (M. William Locard)<sup>9)</sup>

父が、パンキーフィロソフィに共鳴し、活躍している歯科医師のひとりとして書評と推薦文を書いた『ザ・デンタルフィロソフィ 成功への哲学』(1987)の著者ウイリアム・ロッカードの息子ビル・ロッカードは、日本の歯科事情を理解し、憂い、日本の読者に向けてこう記述しています。

日本の公的医療制度における治療費は、歯科医師の熱意に裏付けられた高度な知識や技術、経験を持ってしても、ときに難易度の高い難しい患者さんの場合には、どんなに時間をかけて卓越した治療を提供し、患者さんの満足を得られたとしても、あまりにも低額過ぎます。その結果、歯科医師は大きなストレスを抱え、欲求不満となり、葛藤するのです。

現状の医療制度がどうであれ、あなたの立場にさまざまな問題があったり、働いている現状がどうであったとしても、歯科医業をどのように展開するか、誰のためにするのかということは、あなた自身にかかっています。

この本は、あなたを取り巻くあらゆる囚われごとから、解放され自由を選択しようとする“あなた”を手助けするために著します。

その自由とは、卓越性を達成するために必要な十分な時間とエネルギーを費やし、知り得た高い価値観に基準を置いて常に決断を下し、自らの本意に背くことなく、患者の幸せを願うことです。そして、患者の幸せは、あなたに精神的な安寧を与え、経済的な充足感をもたらし、あなた自身の幸せとなるのです。それは、あなたの周囲を幸せにする“ゆとり”を手に入れるという“自由”なのです。

そしてそこには“自由”を手に入れるための5つのステップが書かれています。

#### 1. Mission 使命：自分に課せられた責任を持って果たさねばならない任務

あなたにとって歯科医師の使命とは何か？

あなたの目指す理想の歯科医師像はどのようなものか？

# Chapter 4

## 行動変容理論のエビデンスが 解明する“伝説の歯科医療”

ここまで示した“伝説の歯科医療”は、決して過去の偉人の話ではありません。そこには、今に通じるエビデンスがあるのです。

あなたの歯科医院の診療の流れ、いわゆる医院システムはどのような根拠に基づいて構築されているのでしょうか？

多くの場合、そのシステムの根拠など考えることなく、以前勤務していた医院のシステムをそのまま真似て行われているのではありませんか？

これだけ医療ではエビデンスの重要性を求められ、治療のエビデンスについてはうるさい歯科医師でさえ、医院システムは利便性や健康保険制度に準じたシステムになっているようです。

医療者側の都合や制度上の規則に縛られ作られた医院システムに、患者さんが従順に従うとは思えません。

伝説の歯科医療では、患者さんの心理を中心に考え、本当の意味での患者中心の医院システムを構築します。

そこには、心理学や行動科学のエビデンスが患者さんを健康行動へと行動変容を起こす医院の考え抜かれた仕組みがあるのです。

“伝説の歯科医療”が語り継がれてきたのはなぜでしょう？

それは、いつの時代にも、どのような経済社会においても、時の試練に耐え得るものだからです。

“伝説の歯科医療”を基礎づけている原理は、例え100年経過しようと揺るぎないものです。

このような原理に純粋に忠実であろうとする態度を、さまざまな事情で変えてしまうことは、これを正しく実行することによって自動的に得られるはずの素晴らしい自己実現を水で薄めてしまうような結果をもたらすのです。

この哲学は全体としてはじめて有効なもので、いいとこ取りも、近道もなければ、省略することもできません。

基本的な原理に忠実な人からは、必ず同じ“証拠”をみることができます。そのような人々から十分に学びなさい。正確に習得しなさい。妥協を許してはいけません。そして、楽しく活気あふれる、素晴らしい歯科医師たちと関わりなさい。